

「イーストウエストセンター」 (East West Center) 在アメリカ合衆国ハワイ州

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2013-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 健治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15000

「イーストウエストセンター」(East West Center) 在アメリカ合衆国ハワイ州

山内健治

二〇〇二年度の長期在外研究の機会を与えていただき、私は、アメリカ合衆国連邦政府研究所「イーストウエストセンター」(East West Center) (以下同研究所)の客員研究員として、一年間の研究生活をおくらせていただいた。

当初の研究課題は「移民と戦争の記憶」であった。同センターは、国際政治学、国際経済学、環境、人口問題、社会人類学を中心に全米から派遣された主任研究員により研究プログラムを組織し、その他は、内外の中・長期の客員研究員で構成されている。客員研究員にも、研究室があてがわれ、研究テーマに関連する全米の各専門機関へのネットアクセス権をはじめ、全米の多様な施設を自由に使用することが許されていた。まさに在外研究者にとってはベスト条件であった。

た。

私は、「戦争」という言葉を研究テーマに入れたせないのか、同研究所の「国家と安全保障プログラム」の客員研究員に所属することになってしまった。社会人類学を専攻する私には、当初は、とても困惑したし不安でもあった。

同研究所は、冷戦構造のまったただ中のジョンソン大統領の時代、一九六八年に連邦政府により設置された。研究所の主な目的は、「東西の社会、経済、文化の総合的研究と東西の研究者交流」にある。中でも、「国家と安全保障プログラム」は、もつとも政治的というか現在の「悪くいえばきな臭い」との評判も聞いていたので、不安はなおさらであった。

しかし、そうした不安は、最初の一月が過ぎ、さま

さまざまな研究員を知り始めると、しだいに解消していった。むしろ、日本では経験できない、クロスアカデミズムの世界を垣間見て、興奮と刺激的な毎日だったような気がする。同研究所のスタイルは、なんでもいから一年間、自分の研究したいことを自身の方法論で研究し、多様な異なる領域の研究者とクロスセッションしながら、まとめていくという方針に貫かれていた。異分野の研究者交流そのものに意義があった。建物は四階建てで、約百五十部屋の個人研究室があり、研究室以外は大小の会議室からなり、いつでもシンポジウムが開催できるし、アートギャラリーも付属していた。大規模な国際会議は隣接する〈Irwin Center〉で開催可能になっていた。だから、ほぼ、毎日、ミーティングがあり、一週間に一度は、大きなシンポジウムが、開催されていた。形式は、多様であるが、特色は、テーマに関連して重要と思われる報告者は、肩書きにとらわれず、可能な限り招聘していたし、都合がつかない場合は国際電話でも参加していた。例えば、七月頃であったか「中東政策」について議論することになった。その席には、中東から招聘した研究員が多く参加し現地の緊張感を伝えてきた。また、ワー



East West Center の国際会議風景

ルドカップが終り、ソウルから、反米感情が高まり始めた頃、「米軍基地と反米感情」についてシンポジウムを開催しようということになった。フィリピン、日本、インド、ドイツ、韓国、サウジアラビア等、米軍の展開する主要な国の基地問題関係者が招聘され、パネルディスカッションの後、在ハワイ米軍基地内司令施設見学もついていた。このディスカッションには、リーダー養成プログラムで沖繩からきていた、Y君と私も沖繩の基地問題について率直に感想を述べた。ほぼ、この頃、同時並行していたテーマの一つに「日本の反米感情」研究があった。「ポチ保守」というキーワードをめぐり、同センターの研究所長、チャールズ・モリソン博士、シエーラ・スミス博士（国際政治学）をはじめ多様な日本研究者間で、議論が交わされていた。私も、日本では読まない雑誌「諸君」を読まされ、小林よしのりの「反米という作法」をハワイで知り、複雑な感想を述べた。学際性という点では、すべてが先端的であった。十一月になると、政治学者もまじえて、比較思想史・日本研究者であるR・ジャクソン博士が、日本映画上映会を開催した。石原慎太郎発言も関係するのだが、石原裕次郎の「狂った

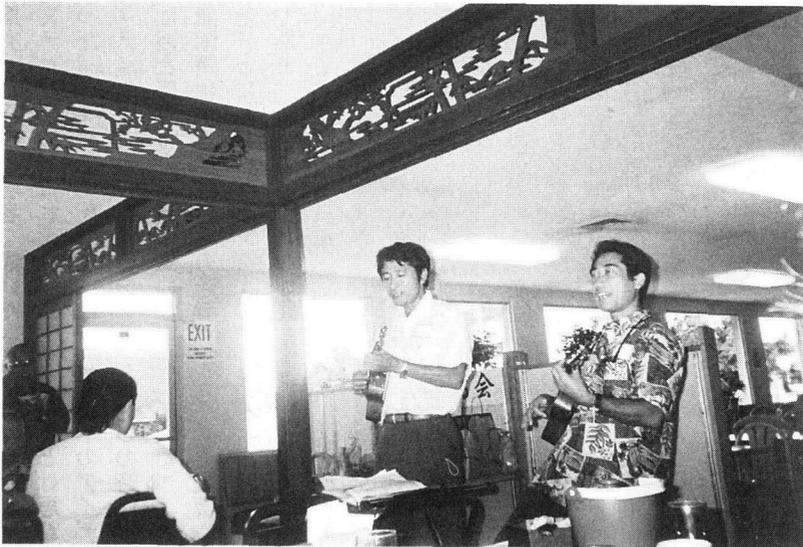
果実」から今の若者を描いた「ピクニック」まで、英文テロップで、これまた、ハワイでみるとは思わなかった。ジャクソン氏の分析は、戦後日本のアイデンティティの崩壊からアイデンティティ探しの時代（確かに裕次郎たち太陽族の風俗は変だと思った）、そして、無国籍化する現代日本の若者までをうまく説明していた。とにかく、同センターの研究構造は縦横無尽なのである。

さて、私の本来の研究課題「移民と戦争の記憶」は、前出の政治学者のアドバイスを受けながら、とりわけ、ジェフリー・ホワイト博士（社会人類学）にお世話になった。かれは「パールハーバーの記憶」や「太平洋戦争における記憶」の第一人者である。私も、六月頃より、ハワイ在住の沖繩系移民の方々に、インタビューを少しずつ、開始していた。そのなかには多様な経験の記憶が含まれていた。ハワイ生まれ三世、「パールハーバー」の直後に祖父と沖繩にもどり、その後、日本海軍の特殊潜航艇の乗員となるが、幸運にも帰還し、戦後、生まれ故郷ハワイに帰米した方、あるいは、やはり、移民三世であるが、アメリカ陸軍として沖繩戦に参加した方、あるいは、沖繩の自決壕

から生き延び、戦後、オアフ島で牧師をされている方等、人生の宿命というか生を教えていただいた。

移民地ハワイでは「ここに幸あり、青い空」という日本歌謡が、今も根強く愛されているが、まさに、この歌の歌詞がピッタリくるのである。この沖繩系移民の調査では、ホノルルから車で一時間くらいにある「ハワイ沖繩センター」の方々に大変お世話になった。また、毎週金曜日、参加していた同センター資料整理のボランティアは、往復のドライブも含めて良い気分転換になった。オアフ島にはH1とよばれるハイウェイが東西に走っている。じつは、私、日本で車の免許を持つておらず、ハワイについて最初にやらなければならなかったことは自動車免許取得と中古車の購入であった。六月中場には免許も車も手に入ったので、左手に真珠湾を望み、右手には、熱帯のブルーゲンピリアやハイビスカスの咲き乱れる丘を眺め、ほぼ毎日、出る虹に突っ込んでいくような初心者運転は爽快であった。

残字数で、ハワイのキャンパスライフについて述べさせていだこう。住まいは、ハワイ大学に隣接するアメリカ生まれ移民三世の家に下宿することになっ



沖繩系移民の忘年会にて「ここに幸あり」のウクレレ伴奏

た。ところが、この家、ハワイでも屈指のフラダンス教室一家でここに入入りするのは、フラ関係者のみ。また、この一家は、煙草、酒は悪魔だと思っているのか厳禁。そして、私は、どちらもヘビー。ウクレレ教室のみ交流のため、お付き合いましたが、フラ話についていけず、というよりはバドワイザーがのみたく、煙草も吸いたく、研究室で寝泊りすることが多かった。ただ、この家でよい経験は、アメリカタイプの家族愛と徹底した個人主義だった。私の子供と同じ歳頃の子供がいたので、ついつい比較していた。残り半年後は、東西センターで、客員研究者用のゲストハウスを用意してくれたので、そちらに移動した。ツインタイプの2LDKという広さで、居こちも良かったが、一人（ちなみに在外研究は単身赴任であった）では、少し広すぎなので、やはり研究室に泊まることが多かった。研究室のあるフロアは、夜中までいろんな国の研究者がコーヒーを飲んだりしながら歓談できるロビーがあった。いつも、そこが一番、落ち着く空間であった。研究室で夜明け前に目が覚めると、よく、車でダイヤモンドヘッド、時には、ビッグウェーブで有名なカイルビーチの先まで行き、三メートルをこえ



右手が East West Center

る波ごしに、昇り来る朝陽をみつめ、観光客のいない早朝のワイキキを走りぬけ朝八時までには出勤可能であった。

ハワイ大学内には図書館が二箇所あり、いずれも、太平洋周辺諸地域の蔵書は質量ともに充実していた。ただ、一つ難点は、恐ろしく寒いことである。熱帯性気候なので、蔵書保管には相当の低温にする必要があるらしく、書庫は、外部の温度と比較すれば、冷蔵庫状態で、二時間もいれば手足がかじかんできた。セーターが必要なほどであった。それ以外は快適で図書館をでたところのカフェテリアでよく暇な時間をすごしていた。また、イーストウエストセンターに隣接してハワイ大学ハワイアンスタディーの校舎があったので良くおじやました。ここは、ハワイ先住民の歴史をネイティブランゲージにより教育するところだが、先住民問題の牙城でもある。

東西センターやハワイ大学のあるマノアという場所は山に挟まれた扇状地状の地形で、北側の山によく二重、三重の虹ができ、時に見惚れていた。月夜にはムーンレインボー（月光による虹）がみえることがあるそうで、これをみれば幸せになれるそうだが、結局、



UH, EastWest center のあるマノアにかかる虹

一度もみれなかった。ハワイは癒しの島なのだ。

さて、今年の夏には、イーストウエストセンターで、世界に散らばる沖繩系移民を集い「第一回世界の沖繩移民国際会議」が開催された。移民の現在をテーマとし結婚問題からやジェンダーロールやエスニシティ議論まで、さまざまなセッションが用意され、ハワイ大学の野球場で、世界の移民によるエイサー大会も催された。この夏、ゼミ学生と共にハワイ調書合宿を行い、「イーストウエストセンター」の縦横無尽研究の再体験を味わうことができた。

いざ来夏も癒しの島のレインボーキャンパスへ。マハロ（さよなら、ありがとう）。